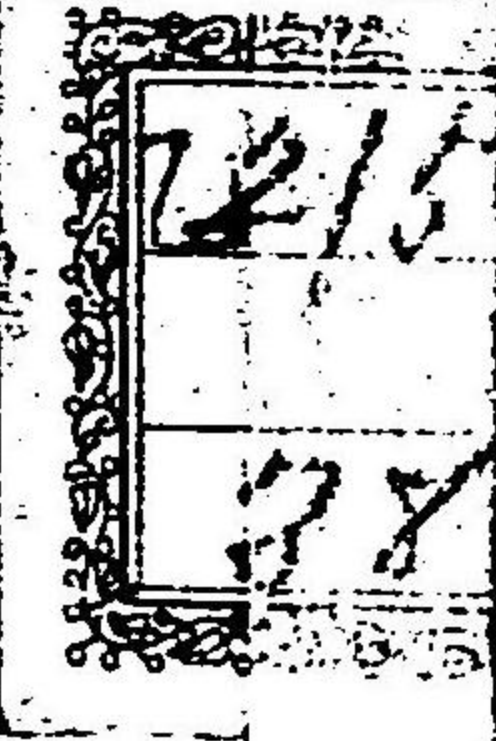


耳5R.63

3439



中等漢文讀本二參考書全

非賣品

國語漢文研究會編  
明治書院發行

049388-001-7

特51-764

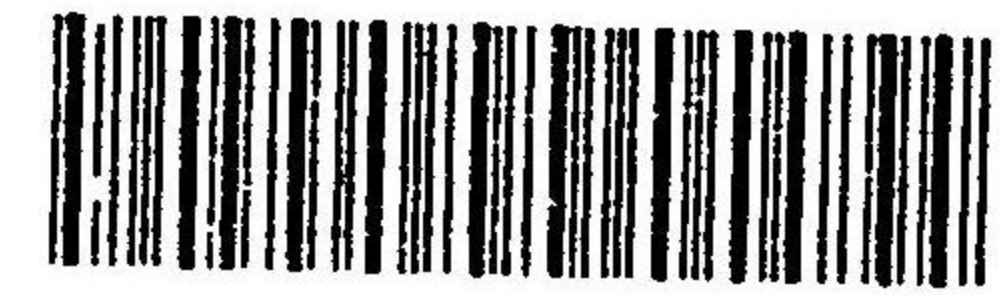
中等漢文讀本參考書

卷1-5, 7-10, 12

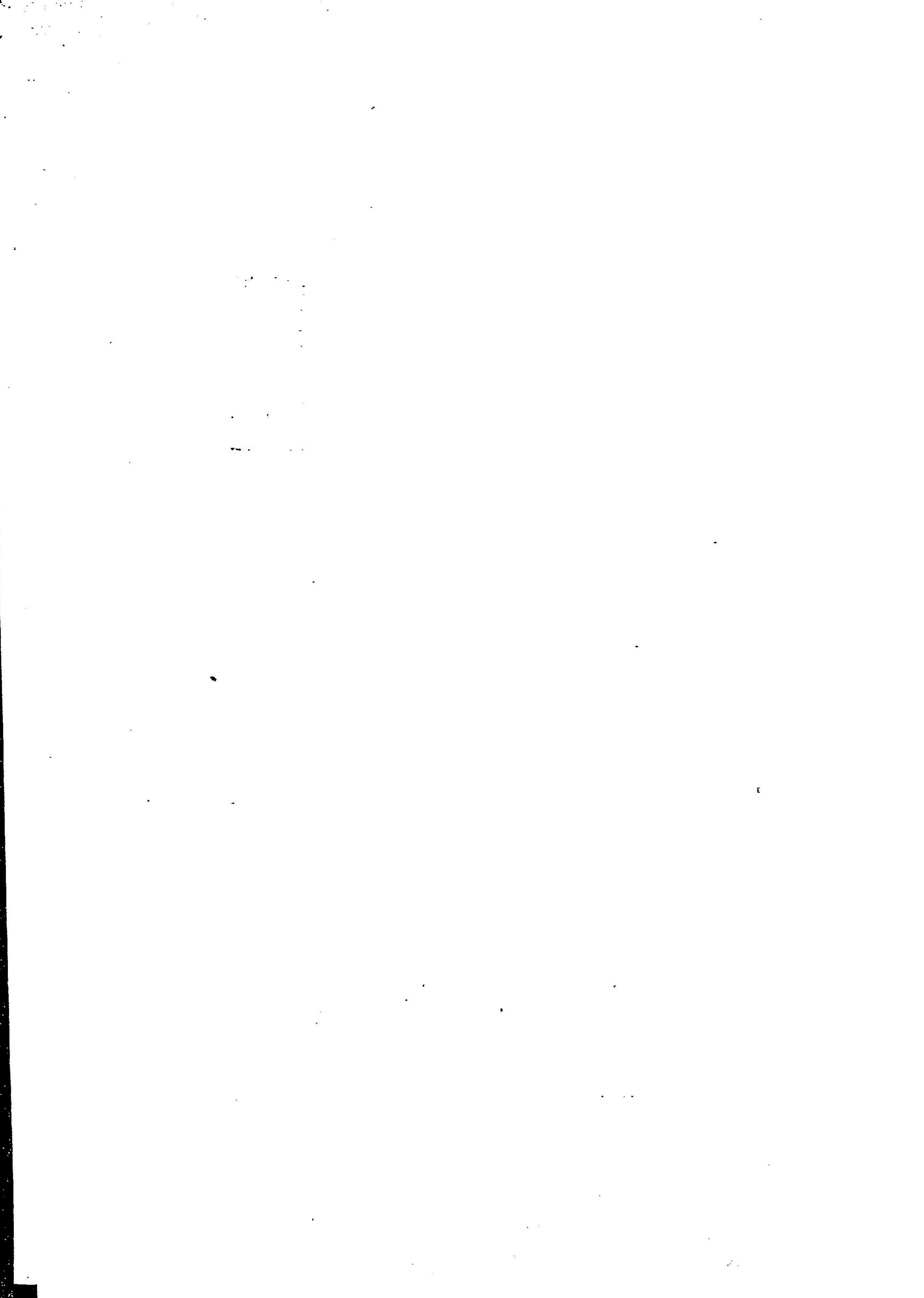
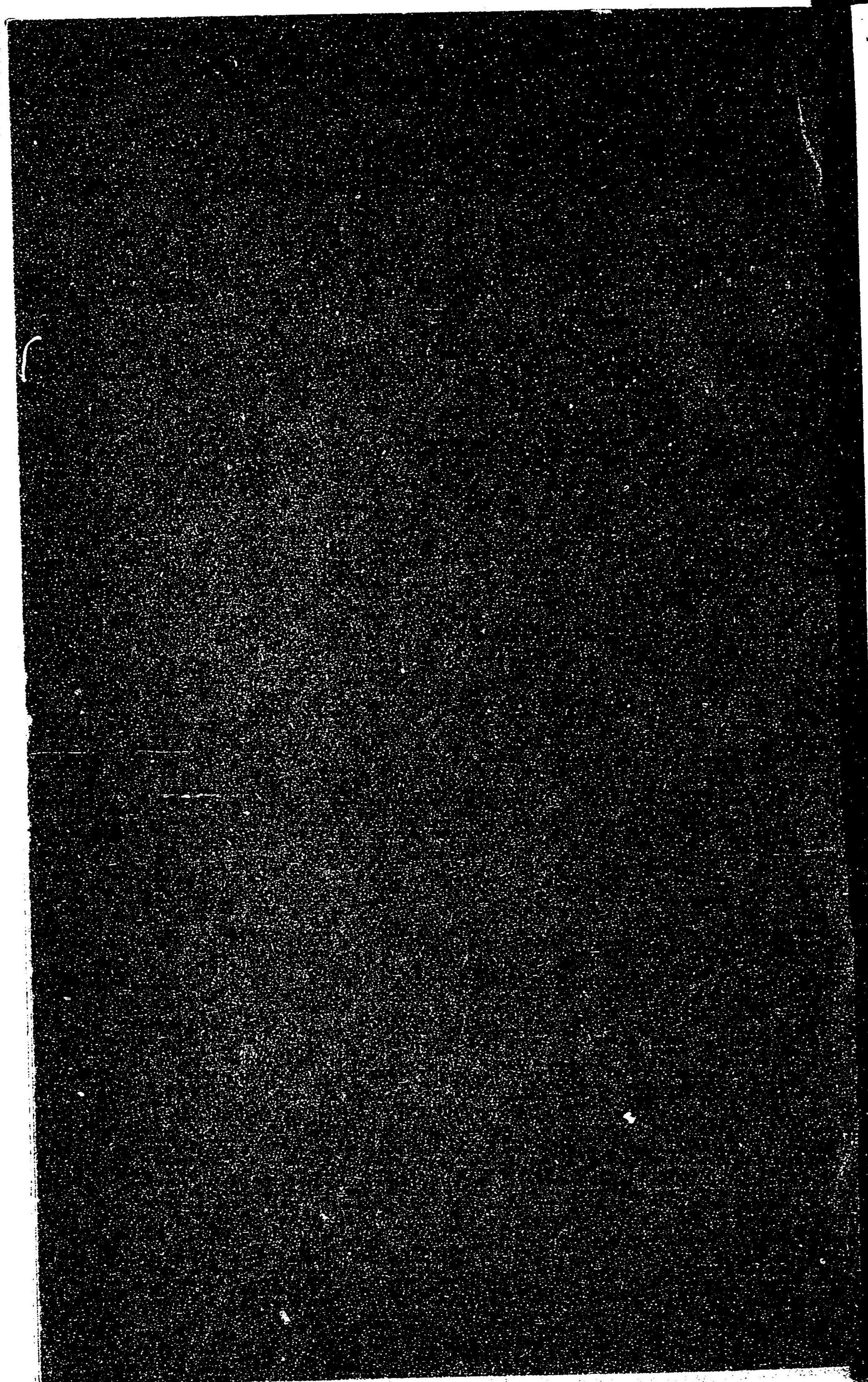
國語漢文研究会/編

M34-35

BEL-0521

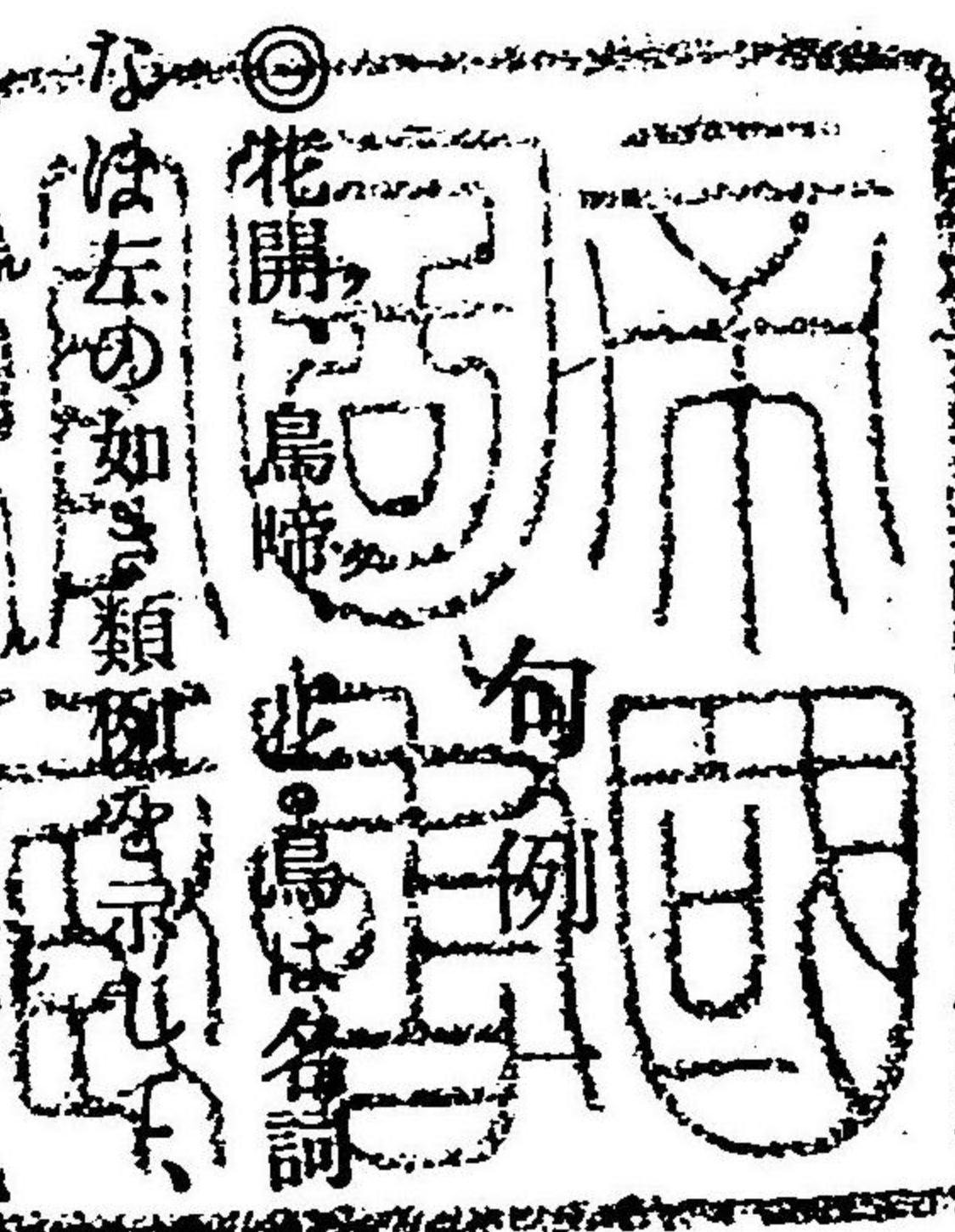








中等漢文讀本卷一參考書



◎花開鳥啼 此鳥は各詞にして、開・啼は自動詞なり、即ち名詞と自動詞とにて成る單文なり、  
左の如き類例を示し、十分にこの種の句法を了解せしむべし。

人走、犬眠、貓戯、船去、車來、火燃、水流、  
雨降、風吹、鳥歌、花舞

◎花開鳥啼、前に示せる單文二個を聯結して、一個の複文となす法を授くるに在り、この場合には、  
「花開鳥啼」と訓ますして、「花開鳥啼」と訓むことを了解せしむべし。

類例

人走、犬眠、犬眠、貓戯、船去、車來、火燃、水流、  
雨降、風吹、鳥歌、花舞

◎梅花開黃鳥啼、すでに花開鳥啼を授けたれば、次には何の花、何の鳥たるかを併せ授くるに在り、  
類





汽船去、電車來、微雨降、輕風吹、

◎山高、湖廣、山・湖は名詞にして、高・廣は形容詞なり、即ち名詞と、形容詞とにて成る單文なり、

類例

花明、柳暗、淵深、氷薄、風寒、日暖、天空、海闊、

◎山高、湖廣、前の「花開鳥啼」の例に準じて授くべし、

類例

花明、柳暗、淵深、氷薄、風寒、日暖、天空、海闊、

山高、月小、月白、風清、

因にいふ、形容詞は、右の如く名詞、(又は代名詞)の下に在るのみに限らず、名詞の上につきて、熟

字となること、例へば高山・大川・深淵・薄氷・寒風・暖日等の類をも併せ授くべし、

◎富士山高、琵琶湖廣、前の「梅花開黃鳥啼」の例に準じて授くべし、

類例

太郎瘦、次郎肥、北海道寒、臺灣熱、太平洋廣、印度洋狹、

◎讀書、寫字、讀・寫は他動詞なり、即ち名詞と他動詞とにて成る單文を授くるに在り、「レ」符

の用法を十分に了解せしむむことを要す、○因にいふ寫字とは、支那にて習字のことをいふ、習字といひては彼に通せず、

類例

學畫、作文、摘桑、耕田、捕蝶、折花、

◎讀書、寫字、

類例

學畫、作文、摘桑、耕田、捕蝶、折花、

◎兄讀書、弟寫字、

類例

姊學畫、妹作文、婦摘桑、夫耕田、四郎捕蝶、五郎折花、

◎登山、泛水、登・泛は自動詞にして、山水は場所に関する名詞なり、すべて自動詞が場所に関する名詞の上にと在るときは、「山」「水」とやうに訓みて、「山」「水」とやうに訓まざることを了解せしむべし、

類例

類例

入門、在郷、上京、遊公園、登山寺、

◎彼登山、我泛水、彼・我は人代名詞にして、彼は他稱、我は自稱なることは、生徒すでに國文法

にて學び知る所なるべければ、更に自稱に吾・余あり、自から謙して、愚・僕・小生などいひ、又

對稱に、汝・女・爾等あり、尊敬して君・足下・先生等の稱あることをも併せ授くべし、



類例、

僕在郷、君上京、我遊公園、汝登山寺、

◎彼登山狩兔、我泛水釣魚、

類例、

僕在郷耕田、君上京修學、我遊公園觀花、汝登山寺賞月、

◎兄愛弟、弟敬兄、

類例、

父愛子、子敬父、夫愛婦、婦敬夫、

◎掬水月在手、掬は音キク、説文に撮也とあり、正字通に、今俗謂兩手所奉、爲一掬とあり、

これ古人の成句にして、弄花香滿衣の對句なり、(滿一に襲に作る)

◎雨後登樓看山、

類例、

浴後坐書齋讀書、食前出庭擊劍、

◎客到汲水烹茶、

類例、

客去磨墨寫字、友人來會緝書論文、

◎乘汽車、發新橋、經名古屋・京都・大阪等、達神戸、

類例、

乘汽船、發橫濱、經神戸・下關・長崎等、達上海、

◎築家屋、先固基礎、基礎不固、有傾覆之虞、

類例、

行船舶、先正羅針、羅針不正、有沈沒之患、

備考 句例一においては、國文と同じく直譯すべき句と、「レ」若くは「一、二」の符を付して、回環讀すべき句とを練習せしむるに在り、これ漢文科に入る門戸なれば、最も意を用ひ、生徒をして明確にこの種の句法を了解せしめむことを要す、されど初より餘り分析に過ぎ、煩細に流れ、生徒をして厭倦の念を起さしむるが如きことは、つとめて避けざるべからず、

句例二

◎箱館在渡島南端、距東京二百二十餘里、

類例、

神戸在攝津南端、距大阪九里餘、

◎比叡山在京都東北隅、爲王城之鎮、鎮は壓なり、正字通に曰く、周禮四鎮、揚州會稽山・青州沂



山・幽州、暨無閩山・冀州、霍山、皆五岳之外、名山也、凡藩鎮・山鎮皆取安重鎮、壓義と鎮臺鎮守府の鎮も同義なり、

類例

東叡山、在江戶東北隅、爲江戶城鎮、

因にいふ東北隅は、俗にいふ鬼門にあたる故に、そを鎮壓する意なり、

◎多摩川、在東京西四里許、以香魚名、香魚は「アユ」なり、鮎は和字なり、神功皇后この魚を釣りにて、勝敗を占はせたまひき、故に占に従ふといふ、一に溪鱸とも書く、

類例、

嵐山、在京都西二里許、以櫻花名、

◎勿謂今日不學而有來日、勿謂今年不學而有來年、宋の大儒朱熹の勸學文の前半なり、後半は、日月逝矣、歲不我延、嗚呼老矣、是誰之愆の十六字なり、朱熹字は元晦、文公と諡す、

◎我軍大戰于平壤、于是前置詞なり、主として下に在る字に係る、於是體と用とを兼ねれども、于是體のみに係る、論語に友于兄弟、施於有政とあるが如し、春秋に、戰于臺、會于宋など地名には于を用ひたり、于是「コ、ニ」と訓み、在の字の義あるによるなり、(于是は於に通用する例なきにあらざれども、姑くここまでは説き及ぼさざるを可とす)、

◎虎産于亞細亞洲之南、以印度・新嘉坡・蘇門答立、爲最多、

◎印度 波斯灣と、ベンガル灣との間に斗出せる三角狀の半島國なり、◎新嘉坡 馬來半島の南端に在る島にして、都府を新嘉坡といふ、人口十八萬餘、東西航路の衝に當るを以て、貿易上樞要の

港とす、◎蘇門答立 馬來群島中の一島にして、和蘭に屬し、人口二百五十萬を有す、

◎校長授與卒業證書於生徒、

類例

會長授與賞狀於出品人、

備考 次の尊氏送正成首於河内も、亦類例として視るべし、○於の用法を併せ授くべし、

◎高島四郎太夫學砲術於和蘭人、高島四郎太夫は號を秋帆といふ、長崎の人なり、幼より火技に志し、蘭書につきて攻究するところあり、後、蘭人につきて、これを學び、頗るその技に通ず、幕府に建議して、大に火器の用ふべきを説き、採用せられて、幕士に教ふ。幕士その能を嫉みて、これを讒するものあり、爲に、捕はれて、獄に投せらる。後、赦されて再び砲術の師範となり、慶應二年江戸に歿す、年六十九、明治廿六年十二月、朝廷その功を追賞して、正四位を贈らる、

類例、

林羅山受業於藤原惺窩、

德川光圀建碑於湊川、

備考 類例は、生徒と問答して成るべく多くこれを授くるを可とす、以下これに同じ、



句例三

◎使<sub>レ</sub>輕騎逐<sub>レ</sub>之、以下數例は使・將・當・須等の如く、一字を再讀する字法・句法を授くるを目的とす、  
類例、

使<sub>レ</sub>精兵攻<sub>レ</sub>之、令<sub>レ</sub>庶民縱覽<sub>レ</sub>之、令は使令也と註す、使よりは意重し、

◎將<sub>レ</sub>乘<sub>レ</sub>汽車入<sub>レ</sub>京

類例、

將<sub>レ</sub>乘<sub>レ</sub>汽車歸<sub>レ</sub>鄉

◎留<sub>レ</sub>京一月許、當<sub>レ</sub>再赴<sub>レ</sub>上海

類例、

在<sub>レ</sub>我國三旬餘、當<sub>レ</sub>再航<sub>レ</sub>米國、學者當<sub>レ</sub>惜<sub>レ</sub>分陰、

◎言語須<sub>レ</sub>簡明、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>噪妄、

類例、

坐作須<sub>レ</sub>安靜、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>粗暴、學業須<sub>レ</sub>嚴立<sub>レ</sub>課程、

入<sub>レ</sub>鄉須<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>鄉、

◎爲<sub>レ</sub>學、當<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>志爲<sub>レ</sub>先、

類例、

修身當<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>正<sub>レ</sub>志爲<sub>レ</sub>本、

備考、右の外、左の諸例をも授くべし、

治<sub>レ</sub>國猶<sub>レ</sub>治<sub>レ</sub>病、猶<sub>レ</sub>緣<sub>レ</sub>木求<sub>レ</sub>魚、未<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>年教化大<sub>レ</sub>行、

學生宜<sub>レ</sub>勤<sub>レ</sub>勉、盡<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>爾<sub>レ</sub>志、

小早川隆景、嘗<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>侍史作<sub>レ</sub>書、謂<sub>レ</sub>之曰、事急<sub>レ</sub>矣、宜<sub>レ</sub>靜<sub>レ</sub>心以<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>之、

◎乘<sub>レ</sub>汽車發<sub>レ</sub>新橋云々

類例、

乘<sub>レ</sub>汽車發<sub>レ</sub>上野、到<sub>レ</sub>宇都宮、若<sub>レ</sub>遊<sub>レ</sub>日光・足尾等者、當<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>此地<sub>レ</sub>下車、

格言五則

◎弟子入則孝、出則弟、論語學而篇孔子の語、下に謹而信、汎愛衆而親<sub>レ</sub>仁、行有<sub>レ</sub>餘力、則以學<sub>レ</sub>文の十七字あり、孝とは善く父母に事ふるを謂ひ、弟とは善く兄長に事ふるをいふ、

◎語必忠信、行必篤敬、この語は、張思叔座右の銘の句なり、蓋し論語衛靈公篇子張問<sub>レ</sub>行、子曰言忠信、行篤敬、雖<sub>レ</sub>蠻貊之邦、行矣云々とあるに本づく、語とは答述をいふ、人に對しての心得なれば、故らに言を語に改めたるなり、



◎病從レ口入、禍從レ口出、傳立口銘の語なり、意は明らけし、

◎滿招損、謙受益、書經の語、下に時乃天道とあり、

◎玉不琢不成器云々 禮記の語

備考 一、にて授くる格言は、主として「レ」符を用ひて讀下すべきものを輯めたるなり、左に類例を示さむ、

士見危授命、論語 節用而愛人、同上 過則勿憚改、同上 君子無所爭、同上

桃李不言、下自成蹊、漢書 瓜田不納履、李下不正冠、文選 言輕則招憂、楊子雲語

居安思危、思則有備、有備無患、左傳

憂國忘家、殞軀濟難、忠臣之志也、文選

遷善則其德日新、遂非則其惡彌積、通鑑

### 中村蘭林

◎中村蘭林 姓は藤原、名は明遠、字は子晦、通稱は深造、徳川幕府の儒員なり、寶曆十一年九月歿す、年六十五、遺命して藏書四十九部を足利學校に寄附せしむ、著すところ學山錄・講習餘筆等あり、◎室鳩巢 名は直清、傳は本書卷の三、自警十條を見よ、◎近世叢語 八卷、角田簡著す、慶長元年以來の逸事異聞を劉向の世説に倣ひ、德行・言語・政事・文學・方正・雅量等數十目に分ち類記す、作者の傳は、卷の三鷗鳥入室の條を見よ、

### 原念齋

◎原念齋 名は善、父を敬仲といふ、念齋の傳は、卷の三順菴有古人節一の條を見よ、◎齋楯 齋は書齋なり、楯は爾雅の釋宮に、楯謂之梁、謂門上橫梁也とあり、◎續近世叢語 八卷著者は角田簡なり、

### 天戒我常不令有閑暇

◎地窩尼修士 暴君なれども、文學を好む、紀元前四百三十年に生れ、同三百六十八年に卒す、◎細細里 地中海の一島にて、昔時王國を建つ、今は伊太利に屬せり、◎西稗雜纂 中村正直著す、小品文を以て、西洋の稗史野乘等の逸話を記す、著者の傳は、卷の二勿譏讐者の條を見よ、

### 不欲虛費光陰

◎墨蘭古敦 獨逸の人傑、一千四百九十七年二月生る、路悌を助けて、宗教を改革す、路悌の大事業の半は、この人の功なりといふ、◎路悌 「ルーテル」ともいふ、獨逸の人傑、一千四百八十三年十一月生れ、一千五百四十六年二月卒す、年六十三、宗教改革者として特に有名なり、

### 黑田如水



◎黒田如水 名は孝高、太閤に親任せらる、如水は剃髪後の號なり、◎日本智囊 六卷、中村栗園著す、わが國の賢君名臣の事蹟の才智に渉るものを、明の馮夢龍の智囊に倣ひ輯録す、

### 大成殿

◎大成殿 孔子は群聖人の道を集めて大成したまひしこと、孟子にいへる如し、故に聖廟を大成殿と名づく、◎林維山 名は忠、一の名は信勝、羅山はその號なり、藤原惺窩に師事して宋學を唱ふ、慶長十一年家康召して博士と爲し顧問に備ふ、後ち薙髮して道春と號す、明曆三年正月歿す、年七十五、著すところ東鑑綱要・本朝編年録・性理字義諺解等あり、◎先聖 孔子を謂ふ、◎綱吉 徳川五代將軍なり、家光の四子にして、家綱の異母弟なり、◎先哲叢談 八卷、原善著す、江戸時代の儒家、藤原惺窩・林羅山より、原雙桂に至る七十二人の性行履歷を記す、

### 群書類従

◎群書類従 わが國の古今の書冊を類輯せしものにて、一千二百七十三種あるを、五百三十卷とし、六百三十六冊(一冊は目錄なり)とす、◎天明 光格天皇の年號、◎塙保己一 武藏兒玉郡保木野村の人、水母子と號す、七歳の時明を失ふ、文學を好み、日夜國典を講究す、保元以降諸家の記録雜書の漸く湮没するを嘆き、廣く海内を搜索して、校訂上梓す、群書類従即ちこれなり、文政四年九月歿す、年七十六、◎浩瀚 廣大の貌、◎國史略 菊地純(三溪と號す)編す、

### 有眼者不便

◎源氏物語 五十四卷、紫式部著す、卷の三紫式部の條に註す、

### 徳川光圀

◎徳川光圀 頼房の第三子にして、水戸の藩主なり、小字は千代松、字は子龍、日新齋・常山人・率然子・梅里等の別號あり、幼にして岐嶷、長じて文武に精通す、彰考館を開き、俊才を招致し、大日本史を編し、又禮儀類典等を輯す、貞享十二年十二月卒す年七十三、義公と諡す、◎從容 從音、シヨウ、從容は安なり、書經の君陳に「以和、また中庸に「中道聖人也」とあり、

### 望月爲和歌

◎阿部仲麻呂 性聰敏にして、讀書を好み、靈龜二年選まれて遣唐留學生と爲る、唐に在りて博識の名あり、姓名を易へて朝衡といひ、唐に仕へて祕書監に遷る、勝寶中遣唐大使藤原清河唐に至る、玄宗仲麻呂をして之に應接せしむ、清河の還るに及び、仲麻呂與に歸らんと欲す、玄宗因て命じて使と爲す、尙書右丞王維等詩を賦して行を送る、明州に至り唐人と別るたましく月を望みて悵然として和歌を詠じて曰く、「あまのはらふりさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも」、因て寫すに漢語を以てして之に示す、衆皆感歎す、海上颶に遇ひ、安南に漂泊し、復唐に至る、官光祿大夫に至



り、御史中丞北海軍開國公を兼ね、邑三千戸を食ひ、寶龜元年正月卒す、年七十、詳しくは大日本史を見よ、◎皇朝史略 十二冊、青山延子著す、神武天皇以來後小松天皇に至る略史なり、著者の傳は、卷の三神皇正統記の條下に註す、

歌仙

◎山部赤人 神龜の初め、駕に紀伊に従ふ、天平中、吉野離宮に陪し、制に應じて歌を作る、履歷明かならず、◎柿本人麻呂 天足彦國押人命より出づ、持統文武の二朝に事ふ、晩に石見に居て終る、墓は大和添上郡に在り、◎論者 紀貫之を斥す、

備考 この一篇は、古今集の序に、「また山部赤人といふ人のありけり、歌にあやしく妙なりけり、人麻呂は赤人が上に立たむこと難く、赤人は人麻呂が下に立たむこと難くなむありける」とあるを譯せしなり、◎大日本史 二百四十六卷、徳川光圀撰す、神武天皇より後小松天皇に至る歴史を、本紀と列傳とに分ち記述す、その後神祇・職官・氏族・兵刑・禮樂等の諸志、續々發行するに至れり、

百人一首

◎藤原定家 三位入道俊成の子なり、尤も詠歌に長せり、正二位權中納言に累進し、貞永元年出家して明靜と號し、仁治二年八月薨す、年八十、著すところ詠歌大概・毎月鈔等あり、◎俊成 幼にして聰慧、和歌を善くす、後鳥羽院に寵用せられ、皇太后宮大夫正三位に至る、元久元年薨す、年九

十一、著すところ古來風躰鈔・長秋詠艸あり、

人行有長短

◎世範 三卷、宋の袁采著す、卷の三桑木因時種植の條に解せり、

虹霓

◎虹霓 虹は説文に、滂竦也霓音「ゲイ」、埤雅に雄曰「虹」、雌曰「霓」とあり、舊説に、虹は常に雙見、鮮盛の者は雄なり、その闇き者は雌なり、一に曰く、赤白色之を虹と謂ひ、青白色之を霓と謂ふと、◎七彩 紫・紺・青・緑・黄・柑・赤の七色をいふなり、◎一道 一條に同じ、◎博物新編 三集、英國の醫士合信著す、一集には、地氣論・熱論・水質論・光論・電氣論を載せ、二集には、天文畧論・地球論を載せ、三集には鳥獸畧論を載す、

涉水鳥

◎鶴 音貫、水鳥なり、禽經に、鶴仰鳴則晴、俯鳴則陰、又鶴生三子、一爲鶴とあり、

魚類

◎漢學入門 一卷、英人理雅各著す、廿三篇、百九十二章より成る、物類總論・身體論・飲食論・居所



論・教學論より、五官論に至る。

### 枇 杷

◎枇杷 廣志に、枇杷は葉微しく栗に似たり、冬花さき、春實る云々、彙苑に、今廣東の人、枇杷を呼ぶ盧橘となし、その葉を無憂扇と名づく、◎本草綱目 三十九卷、明人李時珍が、三十年の歳月を費して著したる書にて、寛文十二年の和版あり、時珍字は東璧、明の蘄州の人、萬曆年中歿す、◎鶏子 鶏卵なり、◎龍眼 熱地に産する果の名、正圓にして六七分、皮に微細紋あり、茶褐色なり、内空くして正中に一核あり、枇杷の核の如し、その中の肉を龍眼肉といひ、薬用とす、◎茅栗 柴栗なり、樹も實も小なれども、味は却て佳なり、古名を「ササグリ」といふ、

### 桔 梗

◎桔梗 「キキヤウ」なり、又「キチカウ」ともいふ、◎杏葉 杏音「カウ」、「アンズ」なり、桔梗の葉は長柄にして、細かき鋸齒あり、◎夏開小花 夏晚秋初に、筒瓣フ、サキ五尖の花を着く、◎牽牛花 朝顔の花なり、

### 徂徠惜分陰

◎物徂徠 名は雙松、字は茂卿、徂徠はその號、江戸の人、古文辭の學を唱へて一世を聳動す、享

保十三年卒す、年六十三、著すところ辨道・辨名・論語徴・徂徠集等極めて多し、

### 油 斷 大 敵

◎永井信濃守尙政ヒナゲ 直勝の第一子なり、元和八年老職に任じ、書院番頭を兼ね、寛永十年職を免し、轉じて山城の淀に封せられ、邑十萬石を食み、京師畿甸の鎮護となる、寛文八年九月卒す、年八十二、◎井伊直孝 直政の庶子、彦根の藩主、萬治二年六月卒す、年七十、◎諺コトワザ 古來誰いふとなく言ひ習はせる語にて、多く訓誡の意を含む、「雨降地固」、不蒔種、不生等コトワザの如し、備考 油斷は、慢の字の義なれども、慢の字としては些の味なし、俗語のまゝ用ひて却つて妙なり、

### 蒲 生 氏 郷

◎蒲生氏郷 小字は鶴千代、世近江日野城に居る、年十三父賢秀に従つて信長に見ゆ、信長これを奇として曰く、この兒骨相凡ならず、他日必ず譽あらむと、字を忠三郎と改む、氏郷敏悟にして武を好む、その岐阜に在る時、稻葉一鐵信長と軍議すること終夜なり、氏郷侍坐して眠らず、特に耳を傾けて之を聴く、一鐵歎賞して曰く、奇童百萬の將帥たらむと、◎事實文編 寫本四十六卷、五弓久文編す、わが天文以來の傳記・行狀・逸事等を輯録し、他日修史の料に供せむとす、編者は雪窓と號し、備後福山の人、明治十九年卒す、年六十四、



### 竹中重治

◎竹中重治 美濃の人、通稱は半兵衛、沉毅にして智慮多し、世人之を楠正成に比す、天正七年六月卒す年三十六、◎中村和 字は子臧、栗園と號す、豊前中津の人、業を帆足愚亭に受け、水口藩に仕へ儒員となる、明治十四年十二月歿す、年七十六、著すところ孝經翼・栗園文鈔等あり、

### 吳氏創蒸氣機關

◎格物入門 七卷、米人丁健良著す、清の同治七年仲春、徐繼畬の序あり、一卷は水學、二卷は氣學、三卷は火學、四卷は電學、五卷は力學、六卷は化學、七卷は算學を説述す、皆西洋の理化學を漢譯せしものなり、著者は耶蘇教の宣教師として支那に航し、傳道太だ力む、支那語に精治し、漢文を善くす、著すところ、別に天道溯源あり、明治十八九年の頃わが邦にも來りしことあり、◎將鐵砲 將は行なり、

### 東京横濱間鐵道

◎鐵道 支那にては鐵路といふ、しばらく通俗に従ひ、鐵道の字を用ひたり、◎菊地純 傳は卷の三、御器皆邦産の條に出づ、◎嚆矢 嚆は設に同じ、叫呼なり、矢の鳴るもの、支那にて射るとき必ず先づ之を放ちて、距離の遠近を定むるより、事の一番はじめなるにいふ、莊子に焉知<sub>マラシヤ</sub>曾史之

### 歴史

不<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>桀跖嚆矢<sub>一</sub>也とあり、曾は曾參、史は史鮪なり、桀跖は盜跖なり、

◎六國史 日本書紀 三十卷、天武帝の皇子舍人親王撰す、神武帝より持統帝に至る凡九百六十二年、續日本紀 四十卷、一卷より二十卷に至るは、從四位下民部太輔菅野真道等敕を奉じて撰す、二十一卷より末に至るは、右大臣藤原繼繩敕を奉じて撰す、文武帝に起り、桓武帝に至る、凡九十五年、日本後紀 四十卷、承和の時藤原緒嗣等敕を奉じて撰す、桓武帝に起り、淳和帝に至る、凡四十二年、而るに全書今は込し、その抄略二十卷、竝に纂一卷尙ほ存す、續日本後記 二十卷、太政大臣良房等勅を奉じて撰す、仁明帝の實錄なり、文德實錄 十卷、右大臣基經等<sub>オチヤフ</sub>上る、實は都良香撰す、三代實錄 五十卷左大臣時平敕を奉じて撰す、清和陽成光孝三代の實錄なり、◎二十二史 史記(司馬遷)、前漢書(班固)、後漢書(范曄)、以上を三史といふ、これに三國志(陳壽)、晉書(房玄齡)、宋書(沈約)南齊書(蕭子顯)、梁書(姚思廉)、陳書(同上)、後魏書(魏収)、北齊書(李百藥)、周書(令狐德棻)、隋書(魏徵等)、南史(李延壽)、北史(同上)、唐書(歐陽修)、五代史(同上)、を加へて十七史といひ、更に遼史(托克托)、金史(同上)、宋史(同上)、元史(宋濂)、明史(張廷玉)を加へて二十二史といふ。

### 招魂社



◎招魂社 東京九段阪上なる靖國神社をいふ、◎扈從 扈音「コ」、尾なり、後從曰「扈」と註す、◎角  
紙 相撲(スマフ)なり、◎手額 景仰する所ある貌なり宋史に衛士望見、以手加額曰、司馬相  
公也とあり、余宗海曰く謂「加敬也」と、

### 鍛匠孫次郎

◎青山延光 佩弦齋と號す、傳は卷の三仁徳天皇の條に出づ、◎直 音「チ」、値に同じ價なり、

### 伊達政宗

◎伊達政宗 幼にして兒戯を爲すに能く節義を守り、毫も私なし、八九歳にして小學に入り、禮樂  
を學び、詩を誦し射御を習ふ、才能人に過ぐ秀吉、家康に仕へ、仙臺に封せらる、寛永十三年五月  
卒す、年七十、◎梵天 「ボンデン」と讀む、梵語(波羅賀磨天)の畧、天竺の波羅門にて能生萬物の  
主の稱、◎不動 佛經に明王の一、不動尊ともいふ、顔色瘳惡にして、右に降魔劍を持し、左に縛  
の繩といふを握り、背に火焰ある像、

### 徳川家康

◎梁飯 韻會小補に、梁粟類、米之善者、五穀之長、今人多種粟而少種梁、以下其損地力而收  
穫少也とあり、

### 道弘節儉

◎綾部道弘 豊後杵築の儒者なり、その先は丹波綾部郡に出づ、元祿十三年歿す、年六十六、詳し  
くは伊藤東涯の作りし傳、又は野史にて知るべし、◎人情難於儉云々、宋の張文節公の、顧人之常  
情、由儉入奢易、由奢入儉難の語に本づく、

### 黒田孝高

◎黒田孝高 已に註せし如水と同人なり、◎岡田僑 字は周輔、鳴里と號す、淡路の人、明治十三  
年歿す、年七十三、著すところ名節録あり、◎日根野備中 弘就の子にして、通稱を高吉といふ、  
天正中、從五位下に叙せられ、織部正と稱す、十八年秀吉に小田原に従ひ、八月信濃の高島城を賜  
ひ二萬八千石を食む、秀吉薨するに及びて、家康に仕ふ、慶長庚子六月卒す、◎棘鬣魚 棘音「キ  
ヨク」鯛なり、◎烹 音「ホウ」調味して煮るなり、前の三十一頁茶壺煮水の煮は、たゞクタクと  
煮沸かすなり、煮粥煮茶の如し、煎は火去汁也と註し、煎りつくるなり、  
備考 野史卷二百に(前略)高吉拜謝、懷銀而去、如水謂左右曰、汝等宜食棘鬣肉、嘗聞織部  
驕侈故欲制之云爾とあり、

### 附録 練習題



明治二年、設電信機、自東京通橫濱、以便公私報告、

明治七年二月、天皇率文武諸臣、臨御于日比谷練兵場、舉行軍旗授與式、

園中所植之花、有如梅、櫻、海棠、薔薇、蘭、菊等、種類甚繁、

英王亞弗勒、分晝夜二十四時、爲二、八時學習、八時飲食應酬、八時睡眠、是良法也、

羅馬帝泰答士、其志急於行善、每夜反省日間所爲、或無一善、則大悔曰、嗟我失一日矣、

凡諸職業、無論公私、其所得、歲至二百圓以上者、隨其多寡以納金、名曰所得稅、

司馬溫公、幼機敏、嘗與群兒戲、一兒墮水甕中、群兒譁皆棄去、公獨以石破甕取兒、得不死、

東照公、嘗謂侍臣曰、爾曹欲保家安身乎、我有五字訣、又有七字訣、請問五字、曰母、盱、上、蓋、邦、音、析、爲、五、字、也、曰字、邊、遠、美、奈、請、問、七、字、訣、曰、識、身、之、分、邦、音、析、爲、七、字、也、曰美、乃、保、登、遠、志、連、

英一蝶、爲人至孝、謫在三宅島、十二年、日夜慕母不已、自作畫、致之於江戶、鬻以給母氏衣食、

中江藤樹、恒患痰咳、每疾累數枕而臥、從愈去之、病革時、其母問之、藤樹懼母之憂、力病手自去一枕、曰、病愈、母曰、然則不日必起、悅而出、藤樹則死矣、

明治二十八年一月、我海陸兩軍共攻威海衛、陸軍繞出敵背、與海軍刻日夾擊、連發巨砲、毀所在砲臺、又放水雷艇、沈敵艦、北洋水師提督丁汝昌知事之不、可爲、請降、悉納兵器軍艦、

巴里爲佛蘭西首府、人口二百四十萬、其幅員不過倫敦三分之一、然建築峻麗、市街整、美推爲歐州冠、

上海屬江蘇省、在楊子江下流、距我長崎九四百七十餘里、人口殆六十餘萬、街衢宏、壯百貨輻輳、帆檣如林、在支那諸港中稱最盛處、

### 格言背誦

己所不欲勿施於人、

論語

良藥苦於口、利於病、忠言逆於耳、利於行、

說苑



千文之堤以螻蟻之穴而潰、

韓非子

少年易老學難成一寸光陰不可輕未覺池塘春草夢階前梧葉已秋聲、

朱熹詩

卷一終

中等漢文讀本卷二參考書

三種神寶

◎三種神寶 天孫降臨の時、天祖の御手づから授けたまひしものにして、八咫鏡・天叢雲劍・八咫瓊曲玉をいふ、この時、天祖天孫に詔してのたはく、吾兒この鏡を視まさむこと、將に吾を視るが如くすべし、殿を同じくして齋きまつれと、瓊々杵尊崩じて、彥火火出見尊これを傳へ、彥火火出見尊崩じて、鷓鴣草葺不合尊これを傳へ、尊崩じて神武天皇これを傳へたまふ、神武天皇より以來歴世の天皇、皆これを傳へたまひしこと、太古の故事の如く、以て 今上天皇に至れり、◎舍人親王天武帝の第三子なり、性聰敏にして學を好む、慶雲四年日本書紀を奉る、これより先、太安麻呂等と勅を奉じて國史を修む、是に至りて成る、紀三十卷・系圖一卷なり、天平七年薨す、年六十、◎天照大神 伊弉諾・伊弉册二尊は、わが皇統の宗祖となす、天照大神は、即ち二尊の間に生れ給ひし神なり、「テラス」は「テル」の延言にて天にましくて照り給ふ意、葦原千五百之瑞穗國 わが國の古名神代紀に見ゆ、古昔國のめぐりの海邊に、葦多く生ひ茂りたれば、葦原の國とはいふ、千五百秋とは、限もなく榮ゆる義、瑞穗は美穀の義にて、稻の穂のみづくしさをいふ、



### 文教始興

◎千字文 千字文は、晋の武帝の大夫鍾繇の撰ぶところ、今ある所ろの千字文にあらず、詳しくは富士谷御杖の、北邊隨筆に考あり、參看せよ、

備考 この一篇は、國史紀事本末より抄出す、その原は左の記紀の文に取る、  
古事記中卷に、明宮、(即ち應神天皇)又科賜百濟國、若有賢人者貢、故受命以貢上人名和邇吉師、論語十卷・千字文一卷、付是人即貢進、(此和爾吉師者文首等祖)とあり、又、書紀に、十五年秋八月、百濟王遣阿直岐、貢良馬二匹、(中畧)阿直岐亦能讀經典、即太子菟道稚郎子師焉、又於是天皇問阿直岐曰如勝汝博士亦有邪、對曰、有三王仁者、是秀也、云々、十六年春二月王仁來之、則太子菟道稚郎子師之、習諸典籍於王仁、莫不通達と、

### 百濟獻佛像

◎大槻清崇 傳は、卷の三奇童の條に出づ、この一篇は、その著、國詩史略より抄出す、その原は書紀欽明帝の十三年の條なり、◎蘇我稻目 石川宿禰の玄孫なり、宣化帝の元年大臣となる、◎物部尾與 荒山の子、欽明帝の時、大連となる、◎伽藍 字典に浮屠所居也と註す、即ち寺なり、

### 弘法大師

◎弘仁 嵯峨天皇の年號、◎空海 德宗の貞元二十年に入唐して長安に抵り、遍く諸刹に遊び、名師を求む、會、慧果阿闍梨に遇ふ、慧果一見して之を喜び、爲めに灌頂して、授くるに阿闍梨の位、竝に諸の法具を以てし、國に歸りてその教を傳へしむ、又屬賓の般若三藏、付するに華嚴六波羅密教等の梵經を以てす、大同元年歸朝す、承和二年三月寂す、年六十二、◎密教 眞言宗なり、眞言とは眞如の密言の義といふ、◎延喜 醍醐天皇の年號  
備考 空海金剛峰寺を創せしことは、歷代皇紀に見ゆ、空海讚岐多度人以下傳密教までは、續日本後紀に見ゆ、

### 始傳鐵砲

◎巖垣松苗 傳は三の卷、清麻呂忠節の條に出づ、◎杜瓦爾 葡萄牙に同じ、天文十年(紀元二千二百二年)の事なり、◎時堯 氏は種子島、◎義鑑 氏は大友左馬頭修理大夫に任ず、屢、近國を掠奪し、富九州に顯る、又西洋と有無を交易す、耶蘇教のわが國に入る、蓋しこの時よりはじまる、備考 この一節の記事は南浦文集に見ゆるを原據とす、

### 家康幼時

◎端午 陰曆五月五日の節句、古は五月の端午の日を用ひたるにより名づく、◎石戰戲 印地打の戲なり、「インヂ」は瓦礫雜考に、石打の譌音なるべしとあり、小石を打ち合ひて戰ふ、參州邊に



行はる、

### 輝虎賦詩

◎頼襄 傳は三の卷、重盛忠孝の條に出づ、◎雅 常に、素より、などの訓あり、こゝは「モトヨリ」と訓む、◎謙飲 謙は醜に同じ、「サカモリ」なり、◎霜滿軍營秋氣清 折から陰曆九月の半とて、霜は陣屋に滿ちて、秋の氣は清く澄みわたれり、◎數行過雁月三更 二三行の雁の過ぎ渡るを見れば、冴えたる月も高く中天にのぼりて、夜もふけゆきて三更(夜の十二時)の頃とはなれり、◎越山并得能州景 見渡せば、越の國の山と、能州の景とを并せて、一眸の中に収め得たり、◎遮莫家鄉憶遠征 遮莫は「然モ有ラバ有レ」の義、爲む方なければ、その儘に任せむとの意なり「マヨ」といふ語に同じ、家郷の人人が、わが遠くこゝまで征伐に來て居ることを氣遣ひてあらむも、マ、ヨいかでこの好景を見捨て、歸らるべき、備考 勇略絶人より、隊伍乃定までは、關東兵亂記に見ゆ、雅好藝文以下は武家閑談に見ゆ、

### 治亂如陰晴

◎齋藤馨 傳は卷の四湊河の條に出づ、◎經雨而地平 雨降りて地固るといふ諺を引きていふ、◎驟雨 俄雨なり、

### 勿譏聾者

◎中村正直 通稱は敬輔、號を敬宇といふ、東京の人なり、嘉永元年昌平阪學問所寄宿寮に入り、安政二年學問所教授となる、同年更に甲府徽典館の學頭となる、慶應二年幕府の命を以て、英國に留學し、明治元年歸朝す、東京女子師範學校攝理・東京大學教授・東京學士會員等となり、明治十九年元老院議官に任じ、二十四年六月特旨を以て正四位勳三等に叙せられ、同月卒す年六十、著譯するところ、西國立志篇・西洋品行論・西稗雜纂等世に行はる、この一篇は西稗雜纂中より抄出す、◎費律布顯理 英王ヘンリー六世、一千四百二十一年に生れ、一千四百七十一年崩す、

### 亢顔談經

◎貝原益軒 傳は卷の三の訓言の條に出づ、◎愾然 愾音「ヂク」、忤に同じ、愾づる貌、◎鼠竄 鼠の竄げかくる、如く走り去るをいふ、漢書蒯通傳の字面、

### 大洋

◎地球説略 三卷米人禔理哲撰す、元治元年の和版あり、◎闊 濶の正字なり、

### 水力上托之理



◎上托 俗にいふ、上壓に同じ、◎稱錘 衡の「オモリ」なり、

### 種樹宜疎

◎植物學 八卷、英國韋廉臣原選、清儒李善蘭譯述、和版あり、李善蘭は西學に通じ、尤も算數に長ず、光緒年間の人、

### 光

◎氣海觀瀾 支那にて出版せし理科の書にて、わが國にても翻刻し、明治初年の頃、學校の教科書となせり、◎兩間 天地間に同じ、◎載籍 書籍に同じ、史記伯夷傳の字面、

### 播殖穀麻

◎穀 楮なり、和名「カウゾ」、(紙麻の音便)といふ、五穀の穀と誤るべからず、備考 この篇、及び次の篇は、國史紀事本末より抄出す、

### 勸農詔

◎詔 説文に、告也とあり、古は上下通用せしが、秦以後天子の御言宣に限り用ふ、わが國にては、臨時の大事に詔と書し、尋常の小事に敕と書する例なり、◎農績 績は書經堯典の、庶績咸熙の傳

に、功也と註す、詩の大雅の維禹之績の傳には、業なりとあり、こゝも農功、農業の義なり、

### 紀州柑園

◎青山延壽 傳は本書、四の卷、國學の條に出づ、この篇はその著大八洲記より抄出す、◎磴 易の井卦の、井甃無咎の註に、結砌也とあり、石を疊むをいふ、◎防 説文に隄也とあり、備考 原文には其盛可知矣の下に、「南龍公時、始命種柑、至今日其盛如此、英主所爲、真可仰也」の二十二字あり、

### 佛手柑

◎鬆 蘇叢の切、亂髮の貌、こゝは疎にして、「スキマ」あるをいふ、

### 榕樹

◎榕樹 榕城隨筆に、閩中多榕樹、因號榕城、枝葉柔脆、幹既生枝、枝又生根、垂々如流蘇、少著物即榮繁、或本幹自相依附、若七八樹叢生者多至數十百條、合併爲一、蟬蟠膠結、柯葉蔭茂と見ゆ、◎重野安繹 成齋と號す、鹿兒島の人、現に東京に住す、

### 公助の至孝



◎古今著聞集 本書三の卷、義家兵法を學ぶの條に解せり、◎隨身 「ズキジン」と訓む、攝政關白などの護衛として、朝廷より賜はる人にて、弓「ヤナグヒ」を負ひたるもの、攝政關白に十人、大臣大將には八人、納言參議には六人、中將には四人、少將には二人、諸衛の督には四人、佐には二人などやうに、人數のさだまりあり、◎賭弓 「ノリュエミ」と訓む、古昔正月十八日の公事、主上弓場殿に臨ませられ左右の近衛府、兵衛府の舍人、弓を射て勝負を試みるを御覽あること例なり、◎世のおぼえ 世人に思はるゝこと、名譽に同じ、

### 公助至孝

◎攝政兼家 右大臣師輔の第三子なり、兄兼通と隙あり、藤原賴忠に代りて太政大臣と爲る、正暦元年薨す、年六十二、

### 伯愈至孝

◎漢書 三十冊、後漢の班固撰す、班固字は孟堅、安陵の人なり、永平中明帝の詔を受けて漢書を作る、二十四年を経て建初中に至り、幾んど成る、高祖より起り、王莽の誅に至る、八表・天文志未だ竟へずして卒す、和帝固の妹、昭に詔して之を踵ぎ成さしむ、

### 森蘭丸

◎森蘭丸 名は長定(一に長康に作る)蘭丸は通稱なり、可成の第三子、美濃の人、年十三、信長に事へ寵遇日に渥し、天正十年六月信長に本能寺に従ひ、力戦して死す、年十八、◎近古史談 四卷、大槻清崇(號は盤溪)著す、織田・豊臣・徳川三代間の名君賢臣節士貞女等の史談を記し、論贊を加へたり、卷首に、鹽谷岩陰の序あり、◎靚 正韻に、七慮の切とあり、伺視なり、靚は俗字、靚に作るを正しとす、唐書張說傳に北寇靚邊とあり、◎諧射 そらで「アテル」をいふ、射は動詞のときは音「セキ」◎款數 「キダ」の數なり、

### 秀忠沈重

◎秀忠 徳川二代將軍にて、家康の第三子なり、寛永元年八月太政大臣に任じ、同九年正月薨す、年五十四、勅して正一位を贈り、謚して台徳院といふ、◎鹽谷世弘 岩陰と號す、傳は本書三の卷、乳雀の條に出づ、◎錯愕 錯は音「サク」、愕は音「ガク」、倉卒驚遽の貌、◎失措 措は厝に同じ、措置を失ふ義なり、◎自若 故の若くにして變らざるなり、戰國策に吾子不殺<sup>トヒ</sup>人、織自若<sup>チル</sup>とあり、◎猿樂 申樂とも書く、散樂の轉なり、音樂歌舞備はりて、一の職業として演ずる戲藝、田樂傀儡等皆これなり、後の能もこれより出づ、

### 犀

◎鼻準 準音「セツ」、鼻頭なり、◎驢「ウサギウマ」、舶來の獸、形馬に似て小さく、耳長くして兎



に似たり、○辟易 開張して舊處を易ふるなり、史記の項羽本記に、人馬俱驚、辟易數里とあり、

### 牛董性度

○牛董 英國人有名なる理學者、林檎の落つるを見て、地球の引力を發明せり、西曆一六四二年に生れ、一七二七年に卒す、

### 終身不能忘

○劉宗周 字は起東、明の紹興山陰の人、學は朱子を宗とす、萬曆二十九年の進士、弘光元年京師陥り、諸臣難に殉ずと聞き、食はずして歿す、著すところ劉氏人譜・問禮・問學等あり、この篇並びに次篇は、人譜より抄出す、○呂蒙正 字は聖功、河南の人、太宗の時進士第一に擧げらる、三たび相位に居り、許國公に封せらる、子の行簡、龍圖閣直學士に至る、○參知政事 參政なり、宋の制度、政事堂と、樞密院と共に禁中に在りて、文武の二柄を對持す、號して二府と爲す、政事堂は、同平章事、參知政事を以て之を主る、

### 忍之一字衆妙之門

○衆妙之門 老子道德經の一章に、玄之又玄、衆妙之門とあるに本づく、衆妙皆一忍字より出づ、故にいふ、○富鄭公弼 字は彥國、河南の人、篤學にして大度あり、仁宗の時茂才異等に擧げらる、

文彦博と並びに相たり、天下稱して富文と爲す、卒して太尉を贈り、文忠と諡す、

### 格言二則

○鶴林玉露 十六卷、宋の羅大經(字は景綸廬陵の人)撰す、その體例、詩話語錄小説の間に在り、大抵議論に詳にして、考證に略なり、和版あり世に行はる、○讀書錄 十一卷、續錄十二卷、明の薛瑄撰す、明代の醇儒、瑄を以て首と爲す、この二錄、一も門戸を詭争する語なし、修身科の参考とするに善し、

### 足利學校

○上杉憲實 山内家四代の主なり、鎌倉の執事となり、安房守となる、文を好み武を嗜み、士民悦服す、天正元年閏二月周防に客死す、○小野篁 傳は本書三の卷、小野篁の條に出づ、備考 足利學校の起原沿革等は、川上廣樹の足利學校事蹟考に就きて、その略を知るべし、

### 早起之益

○六點鐘 六時なり、○贏得 贏は餘輕の切、説文に有餘賈利也とあり、篇海には、贏輸之對也とあり、



### 小川泰山

◎小川泰山 名は信成、字は誠甫、泰山はその號、相州大山山麓の人、幼にして慧悟、好みて字を寫す、安永中松山天姥能書を以て聞ゆ、泰山の書を見て大に之を奇とし、司馬溫公の勸學文を書し  
て與ふ、泰山臨摸し、且つ稍文意を解す、父之を喜び、業を山本北山に受けしむ、これより日夜讀  
書に耽り、尤も子類を好む、天明五年五月卒す、年十七、著すところ墨子闡說等あり、◎東條耕  
字は子藏、琴臺と號す、江戸の人、専ら著述を號とし、晩年龜井戸の祠官と爲る、明治十一年九月  
二十七日歿す、年八十四、著す所、先哲叢談續篇問散餘筆等あり。◎諺 名刺なり、刺を通じて弟  
子となる禮を修するなり、◎北山 姓は山本名は信有、字は天禧、北山はその號、江戸の儒者なり、  
井上金峨の折衷說に服し、その教を受く、年二十二、孝經集說を著して、その名世に顯る、當時物  
徂徠の餘風をうけ、學者李王を宗とす、北山、作文志毅・作詩志毅の二書を著し、之を排撃す、文化  
九年五月卒す、年六十一、著すところ、右二書の外に、古文尙書考、易象義解・論語說等數十種あり、  
◎闕 音「イキ」、門限なり、◎厥 居月の切、偃なり、

### 格言二則

◎言志後錄 佐藤一齋の語録なり、言志四錄(言志錄・同後錄・同晚錄・蓋錄)の一にして、修身齊家の  
心得とすべき言多し、一齋の傳は、本書卷の四、題「小金原捉馬圖卷」の條に出づ、

◎聖人不<sub>レ</sub>貴<sub>二</sub>尺之璧<sub>一</sub>云々 この語、淮南子にも出づ、魏の文帝の典論にも、古人賤<sub>二</sub>尺璧<sub>一</sub>而重<sub>二</sub>寸  
陰<sub>一</sub>とあり、◎文子 二卷、欽定四庫全書簡明目錄に曰く、文子はその名字を知らず、漢志にたゞ老  
聃の弟子と稱するのみ、或は計然といふは誤りなり、書凡十二篇、皆老聃の説を述ぶ、柳宗元はその  
多く他書を竊取し、以て之を合すと稱す、然れども要するにこれ唐以前の古本なりと、

### 光陰有餘

◎設<sub>チ</sub><sub>カ</sub> 羅馬の哲學者、紀元前三年(?)に生れ、紀元六五年に卒す、◎短促 促も亦短なり、速  
なり、光陰の速に過ぐるをいふ、◎功程 仕事の出來たる分量をいふ、

### 讀古今集一千遍

◎古今集 古今和歌集の畧、二十卷、紀貫之・友則・几河内躬恒等が勅を奉じて編輯す、萬葉集につ  
げる歌集にして、勅選集の第一なり、◎雨森芳洲 傳は、本書三の卷、讀書之法の條に出づ、◎對  
馬侯 宗氏なり、◎平仄 漢字には、平上去入の四聲あり、平は上平下平に分る、上去入の三聲は、  
平韻に對して、仄韻といふ、詩に二四不同、二六對、孤平孤仄、平三連、仄三連など、それく平仄  
の規則あり、それをいふなり、

### 鶯宿梅



◎紀貫之 望行の子、書を能くし尤も和歌に長ず、延長中、土佐守となり、承平中、任満ちて京師に歸る、累遷して木工權頭となり、從四位下に叙せられ、天慶九年卒す、◎内侍 ナシシツカサ 内侍司の女官の稱、◎清涼殿 古は「セイラウデン」と訓む、主上の常の御殿の號なり、◎知余玖儺戾婆云々 この歌の意は、天子の勅命なれば、兎や角申すもおそれ多し、故に命の儘に、献上はするもの、若もかの木に巢をつくり宿れる鶯の、歸り來てわが宿はと問はゞ、如何に答へむ、そののみがいたはしとなり、

備考 この題目は、歌の意に取りて、下學集に鶯宿梅とあるによれり、この篇は、大鏡を譯したるものなれば、宜しく原文と對照すべし、

### 平安城

◎延曆 桓武天皇の年號、◎宇多新京 宇多は、葛野郡に屬す、多は一に太に作る、◎小黒麻呂 オグロマロ 藤原氏、房前の孫にて、鳥養の子なり、延曆十三年薨す、年六十二、◎紀古佐美 大納言麻呂の孫にて、宿禰麻呂の子なり、延曆十六年薨す、年六十五、◎子來之民 子の父の事に趨く、召さずして自づから來る如きをいふ、詩經に經始勿トイフ亟ニ庶民子來ニとあるに本づく、◎謳歌之民 徳を稱詠して、これに歸嚮する意なり、孟子ニ謳歌者ニ不謳歌堯之子ニ、而謳歌舜ニとあるに本づく、◎將軍塚 東山の巔に在り、之に登る道は、長樂寺よりする者と、圓山よりする者と、智恩院よりする者との三あり、皆九七八町にして達すべし、眺賜最も廣裕にして、山城の半部を双眸中に收むべし、春日遊

人殊に夥し、

### 秀吉築大阪

◎中井積善 字は子慶、通稱善太、竹山と號す、登菴の長子、五井蘭洲の門に入り、出藍の稱あり、文化元年歿す、年七十五、著すところ草茅危言・逸史等あり、◎宏敬 宏は大なり、廣なり、敬は昌兩の切、曠なり、豁なり、◎四通五達 諸方に通達する便利善き地をいふ、漢書酈食其傳に、陳留天下之衝、四通五達之郊也とあり、◎天正 正親町天皇の年號、◎鳩功 鳩はよく陽氣に聚る、故に義を聚るに取ると、正字通に見えたり、

### 居室

◎要言類纂 三冊岡本監輔編す、監輔韋庵と號す、阿波の人、現に東京に住す、◎郷 向に同じ、◎隙 隙の正字、

### 松壽幼有器量

◎松壽 毛利元就の幼名、松壽丸といふ、姓は大江氏、元龜二年七月卒す、年七十五、この話はその十二歳の時の事なり、◎保 字彙に抱也、全之也、安也、養也、守也などの註あり、保傳キリヤクをいふ、◎庸何 庸は何也とも、豈也とも註す、庸何二字連用しても、「ナンゾ」と訓む、一説に庸は用の虚



用にて、庸<sup>モツテ</sup>何と訓むべしと亦通ず、○髻鬘 髻は音「テウ」、説文に小兒垂結也とあり、鬘は音「シ  
ン」、説文に毀齒也、男八月生齒、八歳而鬘、女七月生齒、七歳而鬘とあり、小兒の垂髪をいひ、又  
齒のぬけ換る頃をいふ、○嚴島神社 安藝の嚴島(周回七里餘日本三景の二)に在り、國幣中社にし  
て、市杵島姫・田心姫・湍津姫を祭る、社記に曰く、三柱の姫、大神は素戔鳴尊の御子にして、天照  
大神の神勅のまゝに、葦原の中津國に天降りまして、天孫の爲めに齋かれ給ふ、皇國の守護神たり  
とあり、

### 元就戒諸子

○毛利元就 弘元の第三子にして、姓は大江氏、小字を松壽丸といふ、その先は、參議左大辨大江音  
人より出づ、安藝の人なり、元龜二年七月卒す、年七十五、詔して正三位を贈らる、元就九男二女  
あり、隆元・元春・隆景・元秋・元清・元康・元政・秀包女は宍戸隆家・上原元將に嫁す、○糾 音  
「キウ」合なり、○隆景 小早川氏、元就の第三子なり、慶長二年六月薨す、年六十五、

### 函人

○函人 具足師なり、孟子に矢人、豈不仁於函人<sup>ナラシ</sup>とあり、○勁矢利鏃 勁は音「ケイ」、健也、堅也  
と註す、こゝはツヨキ矢なり、鏃は音「シヨク」、説文に利也、今用爲<sup>テ</sup>箭鏃字とあり、こゝはスル  
ドキヤジリなり、○鏗然 鏗は音「カウ」、鏗鏘は金玉聲と註す、こゝは矢の甲に中りて鳴る聲をい

ふ、

### 白石製甲冑

○新井白石 名は君美、字は在中、幼にして穎敏、神童の名あり、木下順庵に師事し、博く經史百  
家の學に通ず、將軍家宣に仕へ、帷幄に參し、獻替するところ極めて多かりき、享保十年五月卒す、  
年六十九、著すところ藩翰譜・讀史餘論・折焚柴の記等數百種あり、○家什 食器家具の類をすべ  
ふ、史記の五帝紀の註に、什物<sup>ハツ</sup>謂<sup>フ</sup>常用者、其數非一、故云<sup>フ</sup>什とあり、○蕩盡 蕩は廢壞なり、ヤ  
ブレ盡くるなり、

### 明曆大火

○明曆 後西院天皇の年號、○風靈 靈は音「バイ」、釋名に風而雨<sup>ツク</sup>土曰<sup>フ</sup>靈、靈晦也とあり、○阿  
部忠秋 徳川幕府の老職たり、年甫めて九歳、徳川家光に近侍し、夙夜怠らず、寛永十六年武藏の  
忍城に移され、慶安四年八月侍從に任せらる、延寶三年五月卒す、年七十四、○保科正之 徳川秀  
忠の第四子なり、信州高遠の城主、保科正光の養ふ所るとなり、保科氏を冒す、慶長二十年七月封  
を會津若松城に移され、寛文十二年十二月薨す、年六十四、○増上寺 芝區に在り、三縁山廣度院  
と號す、關東淨家の總本寺、十八檀林の冠首にして、盛大の佛域たり、百一代 後小松院の御願に  
して、開山は大蓮社西譽上人、中興は普光觀智國師なりと、江戸名所圖會に見ゆ、○本莊<sup>ホンシヨ</sup> 今は本



所と書く、十五區の一なり、◎回向院エ コウキョウイン 東京兩國橋の東詰に在り、江戸名所圖會に、當寺は稱念上人の遺風にして、捨世一派の佛域たり、明曆三年丁酉の春、大火の時、焼死の輩の冥魂追福のため、毎歲七月七日大施餓鬼法會を修行すとあり、

### 地中之火

◎掘 「ホル」と動詞に用ふるときは、手扁に従ひ、「ホリ」と名詞に用ふるときは、土扁に従ふ、

### 避雷法

◎窓牖 窓は窓の俗字、鄭玄曰く窓助戸爲明也と、釋名に聰聰也、於内窺外以爲聰也と、牖は音「イウ」壁を穿ち明を取るなり、櫺子レンジ（窓に設けたる格子）窓をいふ、◎紬絹 紬は音「シウ」「ツムギ」なり、絹は音「ケン」「キヌ」なり、◎絲履 生絲にて織り成したる履物なり、單に絲といふときは、蠶絲の義なり、◎總之 之を一括して言はんになり、要之スルニテと略同じ、

### 仁和寺僧

◎仁和寺は山城葛野郡花園村御室ミムロの中央に在り、眞言宗なり、◎徒然草ツレズナクサ 二卷、吉田兼好の隨筆なり、◎婆然 舞ふ貌なり、婆娑と連用して、字彙に舞者之容と註せり、◎涔涔 涔音「シン」、雨多貌、轉じて血又は涙の多く下るにも用ふ、◎蒼黃 忽遽の貌、倉皇に同じ、◎痛楚 楚も亦辛痛の

義なり、◎束手 手の出しやうも無き貌、

備考 左に徒然草の原文を示さむ、

仁和寺の法師わらはの、法師にならむとするなごりとおのく遊ふことありけるに、酔ひて興に入るあまり、かたはらなる足鼎を取りて、頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて顔をさし入れて舞ひ出でたるに、滿座興に入ることかぎりなしはしかなでて後ちぬかむとするに大方ぬかれず、酒宴ことさめて、いかはせむと惑ひけり、とかくすれば、首のまはり缺けて、血垂り、たゞ腫れに腫れ滿ちて、息もつまりければ、打ちわらむとすれど、たやすくわれず、響きて堪へがたかりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角のうへに、帷子を打ちかけて手を牽き、杖をつかせて京なるくす師のがり、あて行きけるに道すがら人の怪み見ることに限りなし、隣師のもとにさし入りて對ひ居たりけむありさま、さこそことやうなりけめ、物をいふもくもり聲に響きて聞えず、かゝる事は文にも見えず傳へたる教もなしといへば又仁和寺へ歸りて親しき者老いたる母など、枕がみに寄り居て泣き悲しめども、聞くらむとも覺えず、かゝる程に、ある者のいふやう、たとひ耳鼻こそ切れ失すとも命ばかりはなどか生きざらむ、たゞ力をたて、引き給へて、薬のしべをまはりにさし入れて、かねを隔て、首もちぎるゝばかり引きたるに耳鼻缺けうげながら抜けにけり、からき命まうけて久しく病み居たりけり、

### 舞妓阿國



○常山紀談 十五卷、湯淺元禎(常山と號す)著す、上杉・織田・徳川等大小の侯伯及びその臣僚に關する雜談を記す、文章よく暢達して、普通文の模範とするに足る、○越前の秀康卿 徳川家康の第二子にして、秀忠の庶兄なり小字は於義麻呂、母は長勝院永見氏といふ、天正十六年三月左近衛權少將に任ず、後ち功を以て越前六十七萬石に封せられ、慶長十二年閏四月薨す、年三十四、○珠數 數個の珠を糸にて貫きて環としたるもの、念佛など唱ふるに、爪にて珠を繰りて、その遍數を計るに用ふ、數珠と書くを可とす、

舞妓阿國

○天正 正親町天皇の時の年號、○藉藉 名聲のかまびすしき、程盛なるをいふ、○伎倆 技能才藝なり、○念珠 即ち數珠なり、○不稱カナヘ 似合はざるなり、○羅衣 「ウスモノ」の衣なり、○宛轉 巧に舞ふ貌、○凝視 凝音「ギヤウ」、目をこらして視つむるなり、○裙釵之流、裙は音「サ」、婦人の兩股笄「フタマタ」下裳なり、紅着絲着などと熟し、主として婦人の裳に用ふ、釵は音「サ」、婦人の兩股笄「フタマタ」ノカムザシ」なり、裙釵之流とは、婦女子の仲間といはむが如し、

菅公忠愛

○菅原道真 字は三、參議是善の第三子なり、幼にして顯悟、後宇多帝の信任を受け、重用せらる、醍醐帝立ちたまふに及び、藤原時平の讒を信じ、太宰權帥に貶せられ、延喜三年二月配所に薨す、

年五十九、○五朝 清和・陽成・光孝・宇多・醍醐の五帝なり、○獻替 獻は進なり、替は廢なり、可を獻じ、又否を替つる義なり、晋書謝弘微傳に、弘微每獻替及陳事必手書、焚草人莫之知之、また唐書元稹傳にも、獻可替否の語あり、○自遣 自ら鬱を消遣して、興を取るなり、○謫居 謫は罪なり、罪せられて配所に在るをいふ、○無膠 膠は音「リヤウ」、聊と同じ、聊頼なくして心安からざるなり、○重陽 九月九日の節句なり、九は陽數なれば、重陽といふ、大鏡に、この事を記して曰く、かの筑紫にて、九月十日菊の花を御らんじけるついでに、まだ京におはしまし、時、九月のこよひ内裏にて菊の宴ありしに、この大臣オトコつくらしめ給へりける詩を、みかどかしこく感じ給ひて、御衣たまはせ給へりしを、筑紫にくだらしめ給へりければ、御らんするにいとゞそのをりおぼしめしいでて、つくらせ給ひける」とあり、日本紀畧に、昌泰三年九月九日、甲午重陽宴、題云三寒露凝ニ云々、十日乙未、公宴、秋思云々とあり、この時菅公の詩は、菅家後集に、九日後朝同賦秋思應制とありて、後半に君富春秋二臣漸老、恩無涯岸スガシ報猶遲、不知此意何安慰、飲酒聽琴又詠詩とあり、○賦詩曰 詩の意は、今年今日こそはかくてあれ、去年の今夜は、我も未だ、帝の御寵愛を蒙りて、清涼殿の御宴につらなり、多くの公卿と共に、秋思を詠する詩を作りて、辱くも帝の御感にあづかりて、御衣をさへ賜はりて、一身の面目この上もなかりしに、今はかゝる身なれば、當時の詩篇を思ひ出しては、空しく今昔の感に腸をちぎる計なり、さてその時、恩賜の御衣は、いかでか疎略に思はひ、こゝまで携へ來りて、日夕捧げ持ちては、當時の餘香を拜すとなり、公の誠忠、よくこの一篇にあらはれたり、



### 村上天皇

◎主殿寮 「トノモレウ」とも訓む、殿守の官の義、古時、宮内省被管の寮、供御、輿輦等の事、及び殿庭、洒掃、燈燭、庭燎等の事を掌る、◎松明 松の脂多き處を割き束ねて、火を點じて燈とするもの、「タイマツ」と訓む、焼松の音便なり、◎大藏省 諸國調物の出納を掌り、權衡度量を均しくし、賣買の估價を知る、被攝に、大少の主鑰、及び藏部・價長・典履・百濟手部・典革・狛部等あり、皆朝廷の調度を造る、被管に、典鑄・掃部・漆部・縫部・織部の五司あり、

### 高倉天皇

◎清原頼業 左大臣夏野の裔なり、高倉帝の侍讀たり、文治五年卒す、年六十八、◎仕丁 「シチャウ」と訓む、一般に使役せらるる「丁」をいふこともあれど、宮中にては、主殿寮に屬して、禁中を掃除し、庭燎を焚くなどの雜役に使はるるものをいふ、◎收 收め捕ふるなり、◎寘 音「シ」、置に同じ、◎林間暖酒焼紅葉 これ唐の白樂天の送王十八歸山寄題仙遊寺といふ律詩中の句にて、白氏文集十四に出づ、曾於太白峰前一住、數到仙遊寺裏來、黑水澄時潭底出、白雲破處洞門開、——「——」——、石上題詩掃綠苔、惆悵舊遊無復到、菊花時節羨君廻とある是れなり、

### 重矩寛厚

◎重矩 氏は板倉、重昌の長子、主水佐と稱す、京師の所司代と爲り、能吏の稱あり、◎瞰其凶 瞰はのぞき見るなり、凶は不在なり、◎室老 家老に同じ、◎屏居 屏は退なり、曲禮に、待坐于君子有告者曰、少閒願有復、則左右屏而待とあり、

### 咬菜軒

◎咬菜 この二字は、次の格言の意に取りたるなり、◎颯 額なり、◎散官 閑散にして卑き官職なり、◎老中 五人あり、初め年寄といふ、(後に閣老ともいふ)禁裏・院中・宮門跡・上方諸大名等の事を掌る、◎知足 足は給足の足にて、有餘也と正字通に註せり、知足の二字は、老子の知足之足、常足の語に本づく、

### 格言二則

◎人常咬得菜根一則百事可作 宋の汪信民の語、呂氏師友雜誌に出づ、胡康侯この語を聞き、節を擊ちて嘆賞せしといふ、人人寒素に耐へて奮勵せば、天下何事か成らざらむ、この語洵に味あり、◎小學 六卷、宋朱熹編す、古來の嘉言善行を類輯して、童蒙の讀本とす、◎士志於道云々 論語里仁篇に出づ、孔子の語、朱子曰く、心欲求道、而以口體之奉不若人爲恥、其識趣之卑陋甚矣、何足與議於道哉と、程氏曰く、志於道而心役乎外、何足與議也と、孔子嘗て子路を稱して曰く、衣敝緼袍、與衣狐貉者立而不恥者、其由也與と、亦この意なり、由は子路の名なり、



東照公の廐

○東照公 徳川家康の諡號なり、○武將感狀記 十卷肥前の儒者、熊澤淡菴の著すところなり、淡菴名は、正興、別號を碎玉軒猪太夫と稱す、平戸藩に仕ふ、○加加爪隼人 名は政尙、通稱甚十郎といふ、家康に近侍し、長湫及び小田原の戦に従ふ、文祿四年春從五位下に叙し、備前守と稱す、(武家補任には、或は隼人正に作る)、慶長元年閏七月伏見城に在り、會 地大に震ふ、政尙壓せられて卒す、歳二十五、○粗 米をときて生ずる白水なり、○粗相 疎略の俗語、

右漢譯文

○岡松辰 字は君盈、壘谷と號す豊後高田の人なり、業を帆足忠亭に受け、尤も文章に長ず、明治二十八年二月肺疾を以て卒す、年七十六、○壘 音「キ」塗なり、○上國 上方に同じ、○幃 蚊帳なり、○米泔水 泔は音「カン」、正字通に米泔(米のとき汁)なりと註す、○壘 音「ザン」、廣韻に遶城水也とあり、○淖 音「タウ」泥なり、「ヌカルミ」をいふ、

福島三傑

○福島正則 尾張の人なり、はじめ秀吉に仕へ、後ち家康に屬す、關原役後、家康正則を安藝備後四十九萬八千二百石に封す、正則家康に謁してこれを謝す、この一節の話は、その時の事なり、元

和五年六月正則民を御する暴虐なりしを以て國除かる、○福島丹波 名を治重といふ、丹波守と稱し、三原城を守る、○近習「キンジュ」と訓む、主君の側近く侍り仕ふる役、近侍に同じ、○かたは片端の義、不具の者を謂ふ、

右漢譯文

○殊功 殊は絶なり、異なり、絶異なる勳功の義、

卷 一一終



明治三十五年三月七日 印刷

明治三十五年三月十日 發行

非賣品

編輯者

國語漢文研究會

東京市小石川區原町百二十番地

發行者

三樹一平

東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者

三島宇一郎

東京市神田區表神保町二番地

印刷所

弘文堂

同所 (電話本局二三一六番)



不許複製

發行所

明治書院

東京市神田區錦町一丁目  
(電話本局二四三八)

全

吉岡平助

大阪市東區備後町四丁目  
(電話東四二一九)



215
38

